

国内外の多様な組織を渡り歩き、アフリカ5か国に10年以上駐在勤務して、医療職ではなくてもグローバルヘルスに携わり続ける上級研究員

## しみず えいいち 清水栄一

国際医療協力局  
連携協力部 連携推進課  
上級研究員



### ★略 歴

- 1996 国立療養所犀潟病院（現 さいがた医療センター）精神科ソーシャルワーカー
- 1997 青年海外協力隊でタンザニアへ派遣
- 2001 コーネル大学大学院国際開発学修士課程修了
- 2002 JICA本部医療協力部（現 人間開発部）調査研究員
- 2004 ユニセフ ナミビア事務所 モニタリング&評価担当官
- 2007 GAVIアライアンス（現 Gaviワクチンアライアンス）資金調達部
- 2011 JICAケニア事務所 広域企画調査員（アフリカ国際保健）
- 2014 スーダン連邦保健省アドバイザー（JICA長期専門家）
- 2016 クラウンエイジェンツ・ジャパン株式会社
- 2017 国立国際医療研究センター国際医療協力局 連携協力部
- 2018 JICAザンビア  
UHC（ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ）のための  
基礎的保健サービスマネジメント 強化プロジェクト出向
- 2020 就業しながら長崎大学よりMPH（公衆衛生学修士）取得

### ★現在の主な担当業務

- ・ WHO事前認証及び推奨取得並びに途上国向けWHO推奨機器要覧掲載推進事業
- ・ 医療技術等国際展開推進事業「ザンビア共和国画像診断検査技術水準均てん化事業」
- ・ UNDPアクセス&デリバリー・パートナーシップ等、国際連携による医療技術評価関連業務
- ・ 全日空との共同開発研究「ザンビア国の地上交通インフラ未発達地域における、ドローンを活用した保健医療物流体制の構築に関する研究」
- ・ 保健システムチーム/UHC・医療経済・医療技術評価勉強会担当

——— 清水さんが、国際協力を目指したきっかけを教えてください。

タンザニアで接したJICA専門家に憧れました。地方で長年米作りを支援されていた農作の専門家でした。「国際協力」を職業とされている方々との初めての出会いでした。私は青年海外協力隊に参加していました。精神科の社会復帰施設で入院患者さん達と一緒に暮らし、換金作物を育てていました。20年以上も前のことです。「いつかは自分もJICA専門家に。」と、漠然と夢を抱いたのでした。日本での快適な生活を捨て、厳しい環境で汗を流す仕事人の姿に、心打たれたのだと思います。それから回り道をしつつ、ようやく夢が叶った時には、15年もの歳月が流れていました。



タンザニアで暮らしていた電気・水道・ガスもなかった村



青年海外協力隊員として野菜や果物を患者さん達と育てていた頃

## 国際医療協力局に入職する前のキャリアを教えてください。

色々やりすぎて、限られた誌面ではカバーしきれません（笑）。

大学卒業後に国内で病院勤務していたことを除いて、国連、国際機関、JICA、開発コンサルタント会社に所属し、一貫して国際保健畑に携わりました。海外勤務はジュネーブにいた4年間を除いては、10年以上をアフリカ5か国で勤務しておりました。

就いた職種も様々です。ユニセフではモニタリング・評価（M&E）を担当し、朝から晩まで資金繰りのためのプロポーザル作成や事業実績分析に明け暮れました。世界子供白書に載せるデータ収集も担当していました。GAVIではアジア圏を担当し、「ワクチン債」と呼ばれる債券を日本の金融市場で販売して、低所得国での予防接種のための資金調達をしておりました。



金曜日は子ども同伴が許されていたユニセフの職場  
ウィントフック（ナミビア共和国）



GAVI事務局長（当時）と第4回アフリカ開発会議に出席 横浜

JICAでは、公募される職種のほとんどを網羅しました（笑）。本部で調査研究員勤務の他、青年海外協力隊、企画調査員、技術協力プロジェクト専門家、保健省アドバイザーを経験しています。そのうち、シニアの協力隊にも参加してみたいです。開発コンサルタントとしてもJICA案件の入札等に参加し、日本のODAについてはあらゆる角度から身をもって実践する場を与えられました。国際協力のキャリア相談で幅広く対応できそうですよね（笑）。

## 国際医療協力局に入職したきっかけ、理由、決め手は何だったのですか。

国際医療協力局のことは以前よりもちろん知っていた憧れの組織でした。ただ、応募要件に必要な医療技術資格を持ち合わせておらず、応募さえできませんでした。15年ぶりに帰国しまして、たまたま日本で働いている時に、非医療職の上級研究員枠が公募され、幸運にも採用されました。とてもレアな機会をつかんだと思います。人並以上に就職活動を経験している私ですが、この就職試験準備は最も大変なレベル感でした。入局した際には、局員の半分くらいが顔見知りだったと思います（笑）。長年この業界におりますと、国際会議等で同じ方々と知り合う機会が増えていきます。憧れの組織に入局できた初心を忘れず、自らの経験を活かしつつ、グローバルヘルスへの貢献にチャレンジしてゆきたいと考えています。

家族と日本の生活に落ち着き始めたところで、海外派遣となりました。なんと再びアフリカへ。神様はなかなかアジアへ行かせてくれないようです。JICA専門家としてザンビアへ赴任しました。UHCプロジェクトと現場では呼ばれまして、結核検体搬送、母子救急搬送、産後出血対策、非感染症疾患（NCDs）対策等の介入支援から、保健計画策定支援まで、カバーする守備範囲が広く大変勉強になりました。



JICAとNCGMの会合にて  
キンシャサ（コンゴ民主共和国）

### 今後の展望、夢を教えてください。

「人を助ける仕事」に関わり続けたいと考えています。それが目に見えない間接的なものであっても、患者さんに寄り添う仕事は、直接的でやりがいを感じました。それが出発点でした。国際協力では、ペーパーワークとミーティングばかりで、時に仕事の本質を見失いがちになります。子供たちに「職場で何をしているのか」と聞かれると、いつも困っています。来る日のために自己研鑽していると「その年になっても未だ自分探ししている」と妻にからかわれます。基本姿勢としては、与えられた人生を欲張らずに感謝しつつ、目の前の仕事を片付けたいと思います（笑）。

今後は論文作成など研究に挑戦してみたいです。これまで現場での実務が長く、学術的な実績を積む機会に恵まれませんでした。国際医療協力局に入り驚いたことは、実務と研究を両立する二刀流の局員の層の厚さですね。入りたての頃は、皆様一体何の話をされているのか、分からないことが多くてボーっとしていたと記憶しています。

これではいかんと、まず手始めに自腹で公衆衛生学の修士課程に入りなおして、最低限のお作法を学びなおしたところです。現在でも局員の「共通言語」を理解するために日々努力しているところです。未だ発展途上の自分ですが、立派な局員になれるよう努力を重ねてゆきたいです。

最後に国際医療協力の世界を目指そうとしている人にメッセージをお願いします。

若い方には響かないかもしれませんが、やはり「健康」でしょうか（笑）。特にメンタル。あとは笑顔。

努力してもどうにもならない時もあります。天命を待つことくらいしかできないのであれば、来る日に備えて知力だけでなく、体力をつけておく。低所得国での勤務はフツーの人であれば心身ともに疲弊すると思います。私自身、家族と離れての単身赴任は堪えました。異国の快適とはいえない環境下では、役に立つのは案外知力より「体力」なのかもしれない、と真面目に考えたりします。私はひたすら泳いだり、走ったりしていましたが、運動による効能を体感しています。うつ病予防にも良いらしいですね。良く眠れますし。今では食事以上に気を使っているくらいです。

「笑顔」というのは運が良くなる気がするのです。何の根拠もありませんが（笑）。私のように、2～3年おきに無職になる人生を送っていると、時には「運」にすぎりたくなるものなのです。養う家族もおりますし。国際協力は高い語学力や技術力が要求される、敷居が高い業種かもしれません。それらを身に着けようと日々努力を重ねても、必ずしも約束されてはいないところが辛いですね。私自身、これまでポストを得るために数えきれないほど落とされています。面接がトラウマになるレベルです。順調に行かない世知辛い世において大切なことは、「基本的」で「ありきたり」なことなのかもしれません。

ありがとうございました。



エボラ出血熱対策支援  
ハルツーム（スーダン共和国）

